

## 「縁」 ～私の34年～

藤尾 知成（教育・平成6年学部卒業 香川大学教育学部附属特別支援学校）

「天皇陛下が亡くなって学校は休みになるけど、君たちは関係ないからね。」通っていた予備校の校長先生の言葉とともに「昭和64年」は7日で終わり、平成に変わった3月半ばを過ぎても私の進路は決まっていませんでした。とにかく家を出たい、早く自分で稼いで文句を言わせない人生を歩きたい、そう思う中、始めて手にした合格通知は中国地方の定時制短期大学からのものでした。1年間お世話になった予備校に出発前のあいさつで訪ねた3月末のある日、予備校の事務の方から「香川大学からあなたの家に追加合格の連絡があった」と聞いた私は、迷うことなく電報で入学の意思を伝えました。この頃から私は「縁」ということを考えるようになりました。実は香川大学に意思を伝えた直後、他の大学からも追加合格の連絡をいただいたのでした。

大学では「養護学校教員養成課程」で繪内先生、脇屋先生、中邑先生、黒田先生、湯浅先生に本当に大変お世話になりました。また、本校で教育実習をさせていただきましたので、当時の大前副校長先生をはじめ、たくさんの先生方にもお世話になりました。途中で奨学金を止められるほど、できの悪い私のような人間を何とか卒業させてやろうと、先生方や先輩、同学年、後輩までもがあらゆる場面で助けてくださいました。特に繪内先生には、卒業研究として脳波測定という貴重な経験の場を与えていただきました。本校には「脳波測定室」がありません。当時は、2晩連続で被検者の脳波を録っていました。脳波計を見ていると「やっと寝たな」とか「夢見てるな」などが分かりました。だいたい午前4時ぐらいまでは脳波計の前でがんばれるのですが、「ちょっと休憩」のつもりがちょっとでなくなり、気が付けば繪内先生にお任せということがよくありました。

「特別支援教育」が始まった平成19年度、私は内地留学生として特別支援教室「すばる」で1年間学ぶ機会をいただきました。知的障害教育校で3年勤務を終えたものの、おそらくこのままではダメになると当時の校長先生が考えてくださったのだと思います。「すばる」では馬場先生、中島先生から発達障害のある子どもたちへの指導支援について、たくさんのことを教えていただきました。

平成29年の最も寒い頃、当時の校長先生から「附属」と聞いたとき、お断りをする理由は全くありませんでした。本校での勤務が始まって間もないある日、私は記憶をたどって現在のパソコン室に入ってみました。そこは、パソコンこそありましたが片側の壁が鏡張りになっており、かつて私が「ちょっと休憩」したことのある「行動観察室」に間違いありませんでした。確信を得た私は、思い切って隣へ続く扉を開けてみました。そこには、動くことのない脳波計と記録用紙やインク、さらに奥には検査用のベッドとビデオカメラ、電極などが眠っており、私の筆跡らしきものも残っていました。

今年3月頭、同郷の幼馴染から「息子が香川大学農学部に入学することになった」と連絡がありました。彼とは3歳（県外の附属幼稚園）からの付き合いです。かねてからさぬきうどんの美味しさを知っている（私が教えました）彼にとっては「サテライト」ができたようですが、私にとっては「またまたの『縁』」と言えそうです。